

とちあいかのイチゴ炭疽病 (*Colletotrichum nymphaeae*) に対する 感受性と各種薬剤の防除効果

1. 成果の要約

「栃木 i37 号」(以下とちあいかと標記) に対し葉枯れ症状を呈するイチゴ炭疽病 (*Colletotrichum nymphaeae*) の感受性を検討した結果、対照のとちおとめに比べとちあいかの感受性が高かった。本病主要防除薬剤の防除効果を検討した結果、アミスター 20 フロアブル、シグナムWDG およびゲッター水と剤の効果が高いことが明らかとなった。

2. キーワード

イチゴ炭疽病、とちあいか、薬剤防除

3. 試験のねらい

とちあいかについては、育苗期間中の新葉の葉枯れ症状が目立つ傾向が認められ、症状部からはイチゴ炭疽病菌 (*Colletotrichum nymphaeae*) が高率に分離される。そこで、本病に対する感受性と主要薬剤の防除効果を検討する。

4. 試験方法

(1) とちあいかのイチゴ炭疽病に対する感受性

試験はとちあいか、スカイベリー、とちおとめを供試し、1区5株の3反復で行った。とちあいか分離菌株 (i37-Ca) を PDA 平板培地で 25℃、14 日間培養後、殺菌蒸留水で 6.4×10^5 個に調整し接種源とした。これを 2019 年 12 月 2 日に分生子懸濁液を手動式噴霧器により噴霧接種した。接種後のイチゴ苗は 25℃ (12L12D) の人工気象室内で底面給水により管理し 5 株ごとにビニルキャップで覆い湿室状態を保った。接種 14 日後に新葉の葉枯れ症状を調査し発病株率を算出した。

(2) イチゴ炭疽病に対する各種薬剤の防除効果

試験はとちあいかを供試し、1区10株の反復なしで行った。とちあいか分離菌株 (i37-Ca) を PDA 平板培地で 25℃、14 日間培養後、殺菌蒸留水で 2.3×10^5 個/ml に調整し接種源とした。これを 2020 年 7 月 28 日に供試薬剤 (12 剤) 散布後に薬液が乾いた状態で分生子懸濁液を手動式噴霧器で接種した。接種後のイチゴ苗は 7 日間寒冷紗で被覆し頭上かん水で管理した。接種後発病状況を程度別に調査し 9 月 18 日 (接種 52 日後) の調査結果から防除価を算出した。

5. 試験結果および考察

(1) とちおとめの発病が認められない中、とちあいかの発病株率は 80% と高く、これまでの知見で葉枯れ症状を呈するイチゴ炭疽病に対する感受性が高いスカイベリーと同等の発病株率であった (表)。

(2) イチゴ炭疽病に農薬登録のある主要 12 剤の本病に対する防除効果を検討した結果、効果の高い薬剤の防除価はそれぞれ、アミスター 20 フロアブルが 100、シグナムWDG が 95、ゲッター水と剤が 90 であった (図)。なお県内においてはイチゴ炭疽病 (*Colletotrichum fructicola*) に対するこれら薬剤の感受性低下が報告されていることから実際の防除の際は、発生している病害を確認し、同一系統薬剤の連用は避けることが重要である。

(担当者 研究開発部 病理昆虫研究室 福田 充*、山城 都)

*現農業環境指導センター



写真 イチゴ炭疽病 (*Colletotrichum nymphaeae*) による新葉の葉枯れ症状

表 とちあいかのイチゴ炭疽病 (*Colletotrichum nymphaeae*) に対する感受性

供試品種	①	②	③	計
とちあいか	2 / 5 ¹⁾	5 / 5	5 / 5	12 / 15 (80%) ²⁾
スカイベリー	2 / 5	5 / 5	4 / 5	11 / 15 (73%)
とちおとめ (対照)	0 / 5	0 / 5	0 / 5	0 / 15 (0%)

1) 発病株数 / 供試株数

2) 発病株率

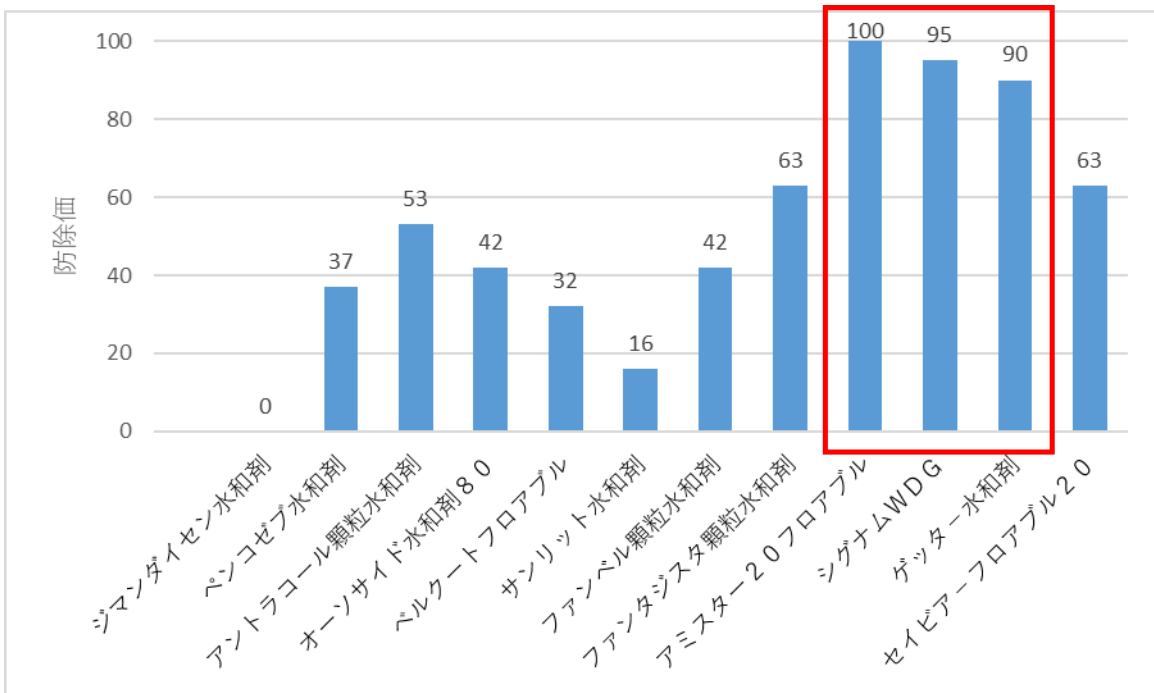


図 とちあいかのイチゴ炭疽病 (*Colletotrichum nymphaeae*) に対する各種薬剤の防除効果

*9月18日(接種52日後)調査結果から防除値を算出